

平成二十七年 度 入 学 試 験 問 題 (一 次)

国 語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一 試験開始の合図まで開けてはいけません。
- 二 受験番号・氏名を解答用紙に記入しなさい。
- 三 試験問題は五題あります。印刷がはっきりしなかったり、問題がぬけていたりした場合は申し出なさい。
- 四 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 五 解答用紙だけを提出しなさい。

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 暖冬による農作物への影響が心配される。
- 2 父の趣味は寺社を探訪することだ。
- 3 海を背景に入れて写真を撮る。
- 4 類いまれな才能を持つ人物。
- 5 新しい練習方法は著しい成果を上げた。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 調査のための地下水をサイシユする。
- 2 道路ヒヨウシキを見落とさないように運転する。
- 3 好ましくない慣習をダハする。
- 4 毛糸でアまれたセーターを着る。
- 5 三月になれば寒さもヤワらぐだろう。

「あら、そう。まあ私には、あなたもじゅうぶん宇宙人のように見えますけどね」

彼はその年の春から同じクラスになった子だった。彼は親しい子がひとりもいなかった。いじわるをされているわけではない。ハセガワ君は力も強いし、泣き虫でもない。でも自分からだれとも仲良くしようとしな。2、彼はときどき自分が宇宙人であると主張した。

3 彼は宇宙についてくわしかった。でも宇宙人である可能性はきわめて低い。だれかが「うそだろ」と言うと、彼はその相手をばかにするみたいな目をした。「いいよ、うそだと思つてれば？」と言り返した。4 みんな何も言えなくなるのだ。

ハセガワ君はたいいひとりでぼつんと座っていた。ぼくは宇宙のことに興味をもっているので、ハセガワ君に何度か話しかけたことがある。でも彼はちゃんと答えてくれなかった。そして残念ながら、彼が宇宙人であるという主張を裏付ける証拠もなかった。

ぼくはそんなことをヒサコさんに話したのだ。  
やがて三十分たつと、ヒサコさんはそわそわと時計を見上げた。「あらまあ、もうこんな時間」とヒサコさんは言った。「早くお帰りなさい。そして、またいらっしやい」

しばらくして、ぼくはヒサコさんから赤くて小さなカバンをもらった。それは長いひもで肩からななめにかけてられるようになっていて、す

「これで気分が味わえるでしょう」とヒサコさんは言った。

それは長いひもで肩からななめにかけてられるようになっていて、す

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(抜き出して答える問題では、句読点、かぎかっこ等の記号は一字として数えること。)

小学三年生の「ぼく(アオヤマ君)」は、赤いポストに目をひきつけられたのがきっかけで街のポストをさがして歩くようになる。郵便局の人の仕事を観察するにつれて「郵便」への思いを強くし研究を進めるのだが、そんなとき通っていた歯科医院でヒサコさんという風変わりなおばあさんと出会う。

ヒサコさんの家はそのビルの一番上の階にあつて、大きな窓からは池と公園の森が見えた。童話に出てくるような花の模様のソファと小さなテーブルのある部屋で、ぼくはおいしいチョコレートももらい、ホットミルクを飲んだ。その部屋の壁には大きな写真がかざつてあつた。南極の写真だ。広々とした氷の大地に、ペンギンたちがぼつりぼつりと立っている。ヒサコさんはペンギンが好きだった。「あれは宇宙から来たみたいなきき物でしょう。だから好きなのですよ」

ヒサコさんは言った。「私と同じ生き物というわけね」

「どうしてヒサコさんは宇宙人なんですか？」

「宇宙人というのは比喩ですよ、あなた。『比喩』つてご存じ？」

「1」ですね」

「その通り。私は昔からあまり人が好きではなかったのね。だから自分は宇宙人みたいなものだと思つていたのですよ」

「ぼくと同じクラスに自分は宇宙人だと言つている子がいます。ハセガワ君というんです」

できなこと郵便局のマークがついていた。ヒサコさんがぬいつけてくれたのだ。そのカバンといっしょに、ぼくはヒサコさんの弟さんが若いころに使つていた紺色の帽子をもらった。「これは学生帽というのですよ」とヒサコさんは言った。弟さんは頭が小さかつたそうだけれども、それでもその帽子はぼくには少し大きすぎた。でもそのカバンをさげて帽子をかぶると、なんとなく郵便局の人らしくなり、ぼくは責任を感じた。

ヒサコさんから郵便カバンをもらったあと、ぼくは手紙を配達したいと思つて、お菓子屋のお姉さんや散髪屋のお兄さんにも言った。でも配達できる手紙はそんなに多くなかつた。学校でもクラスの子たちにはぼくが郵便局を始めたことを言つてみたけれど、手紙を書きたいという人はいなかった。せつかくアオヤマ郵便局を開設しても、使つてくれる人がいないのだ。

そうしてぼくが残念に思つていると、一人だけ手紙を持ってきてくれた人がいた。それがハセガワ君だった。彼はいつもみたいにひとりぼっちで歩いてくると、ぼくの机にノートを切つて作った手紙を一通置いて、「よろしく」と言った。

それがとても奇妙な手紙だった。ぼくが見たこともない○や□や↓の記号が組み合わされた文字であて名が書かれていて、どこに届けばいいのかもわからない。しばらくやんだあと、ぼくはハセガワ君のところに行つて話しかけた。

「これはぼくには読むことができない文字で書いてあるね」とぼくは言った。ハセガワ君は冷たい目でぼくの顔をじつと見た。「それは

宇宙語で書いたんだ」と言った。

「宇宙語？」

「そう。それは火星にあてた手紙だから」

「ぼくは郵便局を始めたけど、火星までは届けられないんだ。火星は遠い」

「いいよ、無理ならそれでも」

ハセガワ君はそう言ってそっぽを向いてしまった。

さすがのぼくも火星へ手紙を届けることはできない。もしハセガワ君が本当に宇宙人であるならば、きっとぼくよりも火星への行き方にはくわしいだろう。でもそんなことを指摘するのはやめておいた。それ以来、ハセガワ君が宇宙語で書いた手紙はぼくの郵便カバンの中に入っていた。ぼくは火星に手紙を送る方法についていろいろなことを考えていた。

数日後、ぼくは郵便カバンと帽子をなくしてしまった。

これにはどうしてもやむを得ない事情があった。

学校から帰ったあと、ぼくは郵便カバンを持って図書館へ出かけた。宇宙へメッセージを送る方法について調べてみようと思ったのだ。ところが途中でぼつぼつと雨が降りだして、遠くの方でごろごろという音が聞こえ始めた。雷はたいへん危険な現象である。ぼくは雷が近づいてくると、その危険性が気になって、他のことが考えられなくなってしまうのだ。

だからぼくは急いで家に引き返したのだけれど、家に到着してみると、郵便カバンと帽子がなくなっていた。雷に気をとられすぎて、

「それではあの手紙の宇宙語はデタラメなの？」

「……デタラメでもないけど」

ハセガワ君はつぶやいた。「でも、もういいよ。なくしたんだろ？それに、どうせ火星なんて送れないよ」

「今はぼくが君からあずかった手紙をなくしてしまったということの問題なんだ。だからぼくはその失敗について君にあやまる。そして手紙をさがす。どうやって火星に送るかというのは、ぼくが手紙をちゃんと取りもどしてからの問題だから、今はとりあえず考えないことにするよ」

ぼくがそんなことを言うと、ハセガワ君はしばらくポカンとしてぼくの顔を見ていた。

「わかったよ。わかった」

彼はそうつぶやいて玄関のドアを閉めた。

郵便カバンを見つけれないでいるうちに、ぼくあてに一通の手紙が届いた。

ヒサコさんからだった。

以下にその手紙を書き写しておくことにする。

アオヤマ君へ

拝啓。

ご機嫌いかがでしょうか。ヒサコです。

わたくしは今、南極におります。あなたが大人になるまで待つわけにはいきませんでしたので、先に出発することにしたのです。

落としたことに気づかなかったのだ。雨が止んで雷の危険性もなくなつてから、ぼくはさがして歩いてみたけれど、郵便カバンと帽子は見つからなかった。

カバンの中にはハセガワ君からあずかった火星に送るべき手紙が入っている。ぼくは今度こそ本当に困ってしまった。

これはアオヤマ郵便局の局員として、ちゃんと責任を果たせなかつたということだ。もしぼくが送った手紙を郵便局の人がなくしてしまつたら、ぼくもかなしい思いをするにちがいない。

どうしても見つからなかったので、ぼくはハセガワ君にあやまることにした。

ハセガワ君の家は小さな緑の丘のふもとにある。

ぼくが訪ねていくと、彼はぼくの顔を見てびっくりしたようだった。

「何の用？」

と彼が言うので、ぼくは彼からあずかった手紙をなくしてしまったことを説明した。

「べつにどうでもいいよ、あんなの」とハセガワ君は言った。

「どうでもいいことはないと思う。なぜならぼくは郵便物として君の手紙をあずかったから。それをなくしてしまうのは郵便局員として失格なんだ。だからあやまらないと」

「でもアオヤマ君は本物の郵便局じゃないだろ？」

「たしかにそれはそう」

「それに、火星なんてどうせ届けられないもん。ぼくは君を困らせてやろうって思っただけ」

ここはまるで世界の果てのような景色が広がっています。ここにはペンギンたちもたくさん暮らしております。そして南極にも赤いポストがあります。わたくしはそのポストを見て、小さな郵便屋さんだったあなたのことを思い出し、こうして手紙を書くことにいたしました。わたくしとあなたは宇宙人のハセガワ君について話をしていました。わたくしはハセガワ君のような子どもでしたから、宇宙人仲間として彼のことがよくわかります。わたくしは宇宙人であることよって、ずいぶんさみしい思いもし、また人にさみしい思いをさせてきました。もつとちゃんとわかり良い手紙を書けば良いのに下手な手紙を書いて、相手を遠ざけてしまうことがたびたびありました。わたくしにとってそれはもう終わってしまったことですが、ハセガワ君にとつてはちがいます。だからわたくしは、もつとあなた方おふたりが仲良くできることを望みます。

あなたのお話を聞いて、わたくしは火星に手紙を送る方法を考えました。かしこいあなたが、なぜその方法に気づかないのか、わたくしにはわかりません。人間をタイムマシンに乗せて未来へ送ることはできませんが、手紙ならば未来に送ることができるではありませんか。

あなたが火星へ手紙を送る方法はこれしかないわたくしは思います。いかがでしょうか。

そこで一つお願いがあります。

ハセガワ君の手紙をタイムマシンにのせるとき、わたくしのこの手紙もいっしょにのせていただけでしょうか。そうすればわたくしの手紙は時間をこえて、未来のあなたのところへ届くでしょう。大人に

なったあなたがその手紙を読み返し、わたくしのことを思い出してくれるならば幸いに思います。

とても愉快な時間をありがとうございました。

わたくしはこの先も南極にとどまるでしょう。なにしろわたくしは宇宙人ですから、このひんやりした場所が合っているのかもしれない。ペンギンもおりますしね。

かしこ。

南極にて 大森久子

ぼくはヒサコさんからの手紙を受け取ったあと、歯科医院のあるビルへ出かけた。

その日は歯科医院に寄るよりも前に、ヒサコさんの部屋へ行ってみた。ぼくはドアをこつこつたたいて、インターホンを鳴らしてみただれど、返事はなかった。部屋の中からは何の物音もしない。

停留所でバスを降りたぼくは、草がのびた空き地のとなりを歩いていった。夕陽が照って住宅街をだいたい色に染めていて、黄金色の草がなびく空き地はサバンナのようにだった。

そのときうしろからバイクの近づいてくる音が聞こえた。「おうい」と声があるのでぼくが顔を上げると、郵便局員のお兄さんがバイクにまたがっていた。いつの日かぼくに「おつかれさま」と言ってくれたお兄さんである。

ぼくが「こんにちは」と言うと、お兄さんはヘルメットの下で笑って「こんにちは」と言った。

「未来には、ぼくらはきつと火星にも郵便を届けることができるようになる。だから今、ぼくが火星に手紙を送るためにできることは、未来の自分に向かって君の手紙を転送することだ。そうすれば未来のぼくが受け取って、火星に送ってくれる。必ず手紙は火星に届くよ」

【ウ】

「つまりタイムカプセルにすること？」

「その通りだ」

ぼくが自分の理論をしゃべると、ハセガワ君はあきれ顔で「ばかだなあ」と言った。そして間を空けてからもう一度「ばかだなあ」とくり返したとき、彼は笑っていた。 【エ】

「どこにうめるつもり？」と彼は言った。

「どこか良い場所を知ってる？」

「ぼくんちの裏の森はどうだろう」

「いいね」

そしてぼくらはタイムカプセルをうめに出かけた。

ハセガワ君の家の裏手は小さな丘になっていて、木々の緑の葉が生いしげっていた。木立の下に入ると空気がひんやりとした。足もとはふかふかしている。見上げると、葉っぱで作られた天井が木もれ日できらきらと光り、せみの声が波打つように聞こえた。

朝の森のおいがした。

「このあたりでいいだろ？」とハセガワ君が言った。

ぼくは郵便カバンからスコップを取り出して地面をほった。

「手伝うよ」とハセガワ君が言ったので、途中で彼にスコップを交代してもらい、ぼくはタイムカプセルの準備にとりかかった。カプセ

「君、最近カバンを落とさなかった？」と彼は言った。

ぼくはハツとして「落とししました」と言った。

お兄さんはにこにこ笑った。

「やっぱりそうか。郵便マークがついてるから、拾った人が郵便局に届けてくれたんだ。君のものだというのはわかったんだが、どこに住んでるかわからなくて、ずっとさがして……」

そうしてお兄さんはバイクの後ろから、ぼくの郵便カバンと帽子を取り出した。

日曜日の朝、ぼくは郵便カバンを持って出かけた。

太陽がざらざらと照って、住宅地の上に見える空が、まるで海辺の街の空のように感じられた。でもぼくらの街は海から遠いので、これはあくまでぼくの印象である。

ハセガワ君の家についてインターホンをおすと、彼が出てきた。

「何か用？」

「手紙が見つかったんだ」

【ア】

ぼくが言っても、彼はとくにうれしそうではなかった。「ふうん」と言った。

「手紙が無事にもどったからには、ぼくは君からあずかった手紙を火星へ届けなければならぬ。でも、今のぼくの技術では火星に行くことはできないんだ」

「そんなのわかってるって」

「でも行けないのは今だけのことだ」

【イ】

「今だけってどういうこと？」

ルの外側は、クッキーのつめ合わせが入っていた四角い缶である。二通の手紙を、母が食べ物の保存に使っているビニルケースに入れ、それをさらに防水シートでくるんでから、クッキーの缶に入れる。二通の手紙のうち、一通はハセガワ君の書いた宇宙語の手紙で、もう一通はヒサコさんからぼくに送られてきた手紙である。

ぼくが缶に手紙をおさめて穴の底におくと、ハセガワ君が缶を指さして言った。

「ぼくの手紙と……もう一つは何？」

「これは南極に行った人からの手紙だ。ぼくは大人になったらこの手紙を読まなくてはならないから、いっしょにうめることにした」

「ふうん」

「ハセガワ君はどうやって宇宙語の手紙を書いたの？」

「教えてあげてもいいけど」

ハセガワ君はタイムカプセルを見つめながらつぶやいた。「どうしようかな」

そしてぼくはタイムカプセルをうめながら、ハセガワ君がどのような宇宙語の手紙を書いたのかということを知った。ハセガワ君は独自の研究の結果、その手紙を書いたのだ。タイムカプセルをうめ終るころ、ぼくはすっかり感心していた。

8 そうしてぼくらは未来と火星へ手紙を送り、友だちになった。

(森見 登美彦 『郵便少年』による)

問一 □ 1に入る、「比喩」と同じ意味を表すことばをひらがな三字で答えなさい。

問二 □ 2・3・4に入ることはとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア たしかに           イ もしかしたら           ウ それどころか  
エ おそらく           カ そうすると           キ しかしながら

問三 — 線部3「らしい」について、ここでの「らしい」がこれと同じ用法で用いられているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 遊びはいろいろあるが、彼にとっては友達と楽しむことが何より大切らしい。  
イ 雨や風が強くなってきた。関東地方に台風が接近しているらしい。  
ウ 聞いた話によると、相手チームのストライカーは足が速い選手らしい。  
エ おとなしい彼だが、いざという時たよりになるところがキャプテンらしい。

問五 — 線部2「残念ながら」とありますが、この箇所<sup>かたど</sup>にこめられた

「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 宇宙のことに興味をもっている「ぼく」としてはハセガワ君の言うことにひかれてはいるが、それを信じさせてくれる理由があまりにも少ないことに物足りなさを感じている。  
イ 親しい友人がいないハセガワ君を心配している「ぼく」は、現実的でない明らかなくそをつき続け孤立するハセガワ君に何と云って良いか分からず途方<sup>とぼ</sup>にくれている。  
ウ 宇宙に関する知識を深めたい「ぼく」にとってハセガワ君は最適な話し相手だと思ったものの、実際はそれほど多くの知識を持ち合わせていないことを知りがっかりしている。  
エ 「ぼく」は自分から誰<sup>だれ</sup>とも仲良くしようとしないうハセガワ君とどうにかして友達になりたいと考えているが、共通の話題となりそうな宇宙のことすら話してくれないハセガワ君の態度をやるせなく感じている。

問四 — 線部1「宇宙人」とありますが、この言葉が示すヒサコさん

とハセガワ君の共通点を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 好きなことが同じ人とはたちまち仲良くなるものの、話題が合わない人とは一切関わろうとしない点。  
イ 人より優位に立ちたいと思うひねくれた気持ちをもっているが、気に入った人とは意気投合できる点。  
ウ 人におもねることをしないため交友関係がせまいが、一人でいることを恥<sup>は</sup>ずかしくない点。  
エ 自分の生き方に絶対的な自信をもち堂々としているが、周囲の人の迷惑<sup>めいわく</sup>をかえりみず行動してしまう点。

問六 — 線部4「でもうやめておいた」とありますが、この理由を説明

したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 答えるのが難しい宇宙の質問をすることでハセガワ君のうそを暴くのは、数少ない友人として気が引けたから。  
イ 時間がたてばハセガワ君のいらつきも解消され、まともな会話が出来るようになると思ったから。  
ウ ハセガワ君の力を借りようとするので、自分が郵便配達に真<sup>ま</sup>剣<sup>けん</sup>でないことをさとられてしまうと考えたから。  
エ ハセガワ君が宇宙人かどうかは問題ではなく、手紙の届け方には自分で責任を持たなければいけないと考えたから。

問七 — 線部5「ぼくはく困ってしまった」とありますが、この理由

を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 火星に手紙を届けられないのは仕方がないとしても、なくしてしまつたとなると落ち度は明らかに「ぼく」にあるから。  
イ 火星に配達できないだけでなく手紙をなくしてしまつたとなると、ハセガワ君に愛想をつかされることが明白だから。  
ウ 手紙が手元であれば火星に届けられたかもしれないが、なくしてしまつたとなるとその可能性を完全に失つたことになるから。  
エ 手紙を入れた郵便カバンをなくすということは、「ぼく」の夢をかなえようとしたヒサコさんの思いを台無しにする行いだから。



か、動物行動に対していろんなことを考える学問があつていいじゃないか、と答えていた。すると相手はわかつたような、わからないような顔をしていた。

有名なのはオーストリアの動物行動学者コンラート・ローレンツ。彼は動物行動を学問の視点で見て議論しはじめた。

それまでは学問的にあつかおうとする人がいなかった。行動はお話としてはおもしろくても、学問にはならないと思われていた。一般人々もそういう学問があるとは思っていなかった。

そこにローレンツのような、動物行動を学問の対象とすべきだと思つた人が現れ、彼の著書『ソロモンの指環』<sup>ゆびわ</sup>を読んでみな感動した。それからはやりだしたのだ。

ぼくはチョウをいろいろ研究したが、はじめから学問の対象として見ていたのではないと思う。

【チョウには蝶道<sup>ちょうどう</sup>があつて決まつたところを飛ぶ。

たとえばクロアゲハは、もつと低いところを飛んでくれたら捕りやすいのに、どうして高い木のあたりしか飛ばないのか。子どものときからずっと疑問だつた。

じゃあ、いったいどういうところを飛ぶのか。

チョウはわけもわからず飛んでいるのではなく、自分の欲しいものを探しながら飛んでいる。すべてのチョウが花を欲して花のあるところを飛んでいるかという、必ず A そうではない。

たいていのアゲハは木の梢<sup>こすえ</sup>あたりを飛ぶ。花がないのにどうしてだろう？ そんなふうにもものを見直していく。】

とつひとつの具体例の積み重ねでしか環境問題は動かないものだ」とよく話した。

具体例をいっしょうけんめい見ていくと、やがて一般解<sup>いっぱんげん</sup>にいたる。一般解ができると、今度はそれにあてはまらない変なヤツが出てくるから、それをまた調べていくと、その答えがわかつて、また話が広がっていく。

はたから見れば、その話は学問的に調べていったことになるのだから、ぼくはただ、どうしてなんだろう、どうしてなんだろうと問うていっただけだ。

東大（東京大学）の理学部に入って、その話をすると、「なぜ」を問うてはいけないといわれた。

なぜいけないのですかと聞き返したら、「なぜ」を問うことはカミサマが出てくる話になってしまう。HOW（どのように）は聞いてよいが、WHY（なぜ）を聞いてはいけないといわれ、そのことを疑問に思った。

何人かの先生からは、そんなふうに考えるのなら東大をやめて京大（京都大学）に行けといわれた。それくらい「なぜ」という言葉は問題があるとされていた。

いろいろ考えて、そんなものかなあ、と思っていた。

物理学で物が落ちる、なぜ落ちるか。万有引力があるからだ、という。D とは聞かない。

だが少なくとも生物の場合は、「なぜ」を問わないと学問にならないのではないかと思つた。かなり厳しくそう思つた。が、それ以上東

考えたら、こんな「なぜ」はわかつてはわからなくてもいいのではないか、くだらない「なぜ」なのではないかという気もする。それをあまり問う人はいなかったわけだが、不思議に思いはじめると不思議なのだ。

そして、その「なぜ」は、調べていったというより、考えていったのだ。山の中で木がいっぱいあつても、アゲハは杉や檜<sup>ひのき</sup>などの人工林を飛ぶことはない。雑木が生えているところを飛ぶ。

そこには卵を産める袖<sup>ゆで</sup>やカタチといった植物が生えている。もしかしたら彼らはミカン科の木の葉っぱに卵を産んで（そこで）成虫になるから、花畑よりも木の梢<sup>すえ</sup>のほうを飛んでいる雌<sup>メ</sup>が多いのではないか。雄<sup>オ</sup>はそこで雌に出会うのではないか。

というぐあいに説明がついてくる。

B を立てて、C に調べてみる。

具体的なことがわかつてくると、だんだん一般にあてはまる理屈<sup>りくつ</sup>が見えてくる。

行動から見ようと思つたのではなく、なんであそこを飛ぶんだろう、なんでこつちを飛ばないんだろう、という、きわめて具体的な疑問が始まりだつた気がする。

動機はそういうふう具体的にでないと、どうもあとがうまく続かないのではないか。具体的に見なければダメだと、ぼくは強く思っている。環境学<sup>かんきょうがく</sup>もそうだと思つた。

ぼくが地球研（総合地球環境学研究所）の所長時代に、「イデオロギー<sup>イデオロギ</sup>や思想<sup>しゆ</sup>、システム<sup>システム</sup>といった大きいところから話をしがちだが、ひ

大の先生たちとは論議しなかつた。

当時、科学というものは、「なぜ」を問わないものだ、と世の中一般にいられていたと思つた。

ぼくは、さあそれでほんとうに学問になるのかな、とそういう疑問を持ち続けた。今になつて思うと、それでよかつたと思うけど、途中<sup>ちゆうちゆう</sup>ではかなり異端視<sup>いたんし</sup>された。

そうした中でも、普通の人々にいろんな話を、まさに科学の話をする機会がある。そのときにぼくは平気で「なぜ」ということを含めて話をした。するとみなおもしろがる。

ぼくにとつてみると、それはとても大事なことだつた。「なぜ」をいわなければおもしろくないということがよくわかつた。

「なぜ」をおおつびらに議論できるようになったのは、やはり動物行動学会をつくつてからではないだろうか。

中には動物行動学は学問としてやっていけないといつていた人もいる。どのように動いているかは問うていいが、なぜそのように動くのか、は問うてはいけないといわれた時代があつた。

京大理学部<sup>きやうだいりがくぶ</sup>の動物学の講座にぼくはそれを堂々と持ち出した。しかし、猛烈な反対があつて、結局最初は講座をつくれなかつた。そのへんはあまり東大と変わりはなかつた。今はもちろん講座はあるが。

普通<sup>ふつう</sup>、ギャンギャン議論して、理論的に通せなくなると折れてしまふ。そうではなくて、反対ならそれ以上いわないことだ。勝ち負けはあまり考えたことがない。でも不思議なことに、あとでぼくのいつたようになったなあということが何回もあつた。

要するにぼくはあんまり人のいうことをまじめに聞いていないのではないだろうか。まあ、そうでもないんじゃないか、とずうずうしく思っている。

自分の思った道をすくすくと行けばいい。人を説得しなくては、なんて思わない。自分がそう思っていればいい、と思う。

目の前のなぜを、具体的に、議論するのではなく、なぜだろうと考える。ある意味では、目の前の対象は具体性があるから強い。

科学はもともとが自然。人間がつくったものは工学。エンジニアリングになると、人間の欲望や何かがちやちや入ってきて、すつきりしたものでなくなるように思う。

自然というのはけっこう複雑で、ひとつの要因では説明できないよ  
うな、おもしろいことがいっぱい出てくる。

経済もおもしろいだろうけど、そこには人間が金もうけをしようという、ひとつの意図しかない。

が、自然の場合はいろんな意図がきつとあるのだろう。それを解き明かしていくだけで十分おもしろい。それは人間のやっていることではないから。

ノーベル賞を受けた研究もそうだ。役に立とうと思つてやっていることではないだろう。

\*量子物理学の話で、なぜ地球がなくならなかったのかという疑問は、なくなろうがなくならなかつたか誰が得をする、**E**をするという話ではない。

<sup>9</sup>科学を志す人には、なぜということしかない。おおいに「なぜ」に

問一 —— 線部 a～d の熟語の中で構成の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 —— 線部 1「いわば」5「おおつびらに」を言いかえたものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 いわば
- ア いったところで      イ いわなければ  
ウ いったみれば      エ いわずとも
- 5 おおつびらに
- ア 大々的に      イ 公然と  
ウ おおげさに      エ はつきりと

問三  A に入ることばをひらがな二字で答えなさい。

問四  E に入ることばを漢字一字で答えなさい。

取り組めばいい。自分の「なぜ」を大切にあなたため続けたいと思う。  
(日高敏隆『世界を、こんなふうに見てごらん』による)

\*戦時教育下Ⅱ第二次世界大戦末期で、学校の授業を原則として停止し、生徒・学生を本土の防衛や生産の増強にあたらせていた状況。

\*学会Ⅱ学術研究の促進や学者同士の連絡など、同じ分野の専門家によって組織された団体。

\*環境学Ⅱ人間の生活を取りまく環境がその人間や動植物へどのような影響を与えているのか研究する学問。

\*イデオロギーⅡ歴史的・社会的な立場に基づいて作られる基本的なものの考え方。

\*システムⅡ組織や制度などの、まとまりをもったつながりのこと。

\*一般解Ⅱここでは、「広く当てはまる考え方」の意味。

\*粛々とⅡ堂々と、さわぎたてることなく。

\*量子物理学Ⅱ原子や分子など、小さな粒子の性質などを解き明かし、それをもとにしてさらに大きな物理現象まで考える学問分野。

問五 —— 線部 2「ぼくにしれない」とありますが、この説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 動物の目線に立って心を通わせながら研究するという手法は、人間本意の研究態度と一線を画すものであったということ。
- イ 動物の行動理由を明らかにし、その成果を学問の一分野として世の中の役に立たせたいという思いが幼少期から芽生えていたということ。
- ウ 誰も関心を持たないささいな疑問に注目することが、結果的に将来の大きな研究成果に結びついたということ。
- エ 動物の行動への疑問から考えを深めていく方法は、後の研究者としての筆者の姿勢と変わらないものであったということ。

問六 —— 線部 3「そういう話では何もわからない」とありますが、この理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 行動の原理を明らかにしたところで、その目的がわからなければ対象を理解したことにならないから。
- イ 動物の行動の仕組みについて新たに考えたところで、今までにあった研究成果と大きい違いは出てこないから。
- ウ 動物の意思に思いをめぐらせたところで、それを証明する材料を見つけることは困難だから。
- エ 行動の意味をはつきりさせたところで、その原理に不明確な部分があれば学問として認められないから。

問七 文章中の「」内で述べられているものの見方について説明した次の文の空欄にあてはまる最も適切なことばを、これより後の文章中から六字で抜き出して答えなさい。

を出発点として考えを進めていく。

問八  B・Cに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

- ア B 計画      C 形式的      イ B 仮説      C 実際  
ウ B 見通し      C 大まか      エ B 事実      C 仮

問九 — 線部4「なぜ」をくわってしまおう。」とありますが、この説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 正解を決めることができな科学分野で「なぜ」という問いを立てることに、多大な時間を研究に費やす覚悟が必要となるということ。

イ 科学研究で「なぜ」という疑問に答えをみつけようとすると、宗教的な意見の対立が生じる可能性があるということ。

ウ 科学研究で「なぜ」という疑問を持つことは答えの出ない問いかけをすることであり、学問の手段として認められないということ。

エ 客観性を重視する科学分野で「なぜ」を問うことは、ひとりひとりの見方を尊重するというまったく新しい試みであるということ。

問十三 — 線部8「役にくことではない」とありますが、筆者が科学研究をする理由について述べた次の文の空欄にあてはまることばを

文章中から十六字で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

科学の研究をしていくと  から。

問十四 — 線部9「科学をくことしかない」とありますが、この理由

として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 具体的に対象を見ようとしな科学問は机上の空論でしかなく、人の役に立つ学問だとは言えないと考えているから。  
イ 人間の思惑が複雑に入り組んだ分野の学問に比べ、自然の意図を明らかにするという科学の明快な目的は若者にふさわしいと考えているから。

- ウ 議論に労力を費やすのではなく、疑問点を一人で地道に追究した方が研究成果を出しやすいことを筆者は知っているから。  
エ 自分がいだいた疑問に向き合い続ける姿勢が、自然の意図を解き明かす科学のおもしろさに結びつくと考えているから。

問十  Dに入る語句を、「万有引力」ということばを用いて十五字以内で答えなさい。

問十一 — 線部6「ギャンギャンく折れてしまおう」とありますが、筆者がこのような姿勢に否定的な理由を説明した次の文の空欄に入ることばを文章中から十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

という思いにとらわれていると、研究対象についてそれ以上、考えを深めることをしなくなってしまうから。

問十二 — 線部7「目の前のく強い」とありますが、この理由として

最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 対象について具体的な疑問を持つことができ、これについての考察を重ねることで研究が広がっていくから。

イ 議論では導くことのできない説得力のある理由を必要な時に取り出すことができ、対立意見に負けることがないから。

ウ 人間がつくったものは研究対象としてすつきりしていないため、具体的な疑問を通して考えるおもしろさが欠けているから。

エ 一般的な理屈というものは具体例から導くもので、議論を重ねて正解を求めるのは正しい方法と言えないから。

## 五

次の1～5の熟語と同じような意味になる二字の熟語を、後の漢字を組み合わせて一つずつ作りなさい。

- 1 消息      2 価格      3 追加  
4 友好      5 承認

補 可 信 値 伝 段 足 安  
許 親 楽 同 音 善 成 普

# 国語解答用紙

受験番号

番  
氏名

五	四				三				二	一	解	
	問三	問十	問六	問一	問三	問八	問四	問一	1	1		
1											答	
2	問三		問七	問二	問三	問九	問五	問二	2	2		
				1								
3	問三			5	問三	問十	問六		3	3		
4			問八	問三						4	4	
							問四			4		
5		問十	問九					問十	問七		5	5
				問五		問十		問三				
									(また)	(い)		
									(ち)	(い)		
合計												得点

合計
----